

袈裟を捧持して韓国へ

海外留学僧派遣育英会常務理事
龍光寺住職 佐藤俊明

台風同伴の旅

テレビに写し出された台風の進路予想図を見ると、今日これから出かけようとしている韓国に向っている。

九条のお袈裟二肩を携え持って二十九日に出発するのだから台風九号が同伴をしてくれるのも何かご縁がありそうなことだが、さて飛行機大丈夫かな？と一抹の不安を感じた。しかし快晴の天気なので予定どおり十時にタクシーを

呼んで寺を出た。

スイスイ走る冷房のきいたクルマの中で快い眠りに誘われ、目を覚ましたらもう空港の近くだった。私が目を覚ましたのをみて、運転手が「ラジオで聞きましたが、釜山行きは欠航だそうですね」と教えてくれた。

予想どおり十一時半に南ウイングに着いた。善光寺さんがた、早く着いてくれればいいが、早く十二時だろうなア」と考えながら大韓航空のカウンター前の空き席をさがしたら、これ

また意外、そこに善光寺方丈・理事長夫妻が坐
っておられる。

「はやかっただすね。混んでませんでしたか」
「いや、十八キロ渋滞ということで、クルマが
さっぱり動かないので、これじゃとてもダメだ
と思ひ、クルマの中から連絡をとり、ヘリで来
ました。ヘリも三分ばかり待ってもらつてよう
やく乗れました」

「ところで釜山行きは欠航だそうですね」
「そうですね、それは知らなかつた」

ということ、途端にあわただしくなつた。
さいわい十二時三十分発のソウル行きがある
ので、急げば乗れる、それでゆこうときまつた
ところへ東先生が到着された。早速荷物を出し、
出国手続きを済ませ、ゲート前のロビーに到着
したので離陸十五分前。

予定変更を韓国で待機している留学僧の李さ
んに知らせなくてはと、ここで電話をいれる。

ようやく通じて話をしていうち、乗客はみな
飛行機に乗りおわり、私たち四人を残すだけと
なつた。理事長の電話の終るまで、と、なんと
か頼み込み、ようやく機上の人となることか
できた。

さて、これにて一件落着したもの、釜山北
方四十キロの寺にいる李さんが、五百キロ離れ
たソウルに、しかも飛行機の飛んでゐるわず
二時間の間に、連絡がとれて有効適切な手配が
講じられるであろうか。もし金浦空港に誰も出
迎えてくれなかつたらどうするか。式典は明日
十一時、なんとしても今日中に釜山に行かねば
なるまいが、言葉が通じないので果たして思
いどおりに事が運ぶかどうか等々、心配すれば切
りがないが、仏さまのご用で来たのだから仏さ
まが道を開いてくださるに違ひない、と心に決
め込んで、無駄な心配はしないことにした。

ここで仏様のご用、このたびの訪韓の目的に

ついで述べると、昨年四月訪韓した際、通度寺の博物館長釈梵河師から「仏宝の大本山通度寺において、明年世界の各地より袈裟を集めて一堂に展示し、多くの人々の拝観に供する計画を立てているので、ぜひ日本曹洞宗の袈裟を出展してほしい」との要請があり、善光寺方丈がその求めに応じ、金襴と麻の九条袈裟及び絡子を発注制作し、このたびそれを携持する運びとなったものである。

さいわいにも今年度善光寺留学僧に決った東洋大学一年在学の李煥秀君は通度寺在籍の学僧だったので、彼は数日前、私たちの訪韓受入れ準備のため通度寺に帰山しており、万事好都合に事が運ばれた。

ここでお袈裟について一言すると、お袈裟はお釈迦さまが身にまとわれたものであり、出家修行者の正式の着衣である。出家得度の式で師匠から頂戴し、死に至るまで毎日着用し、仏の

教えを受持し、他に伝え、そのおかげを蒙るの
がお袈裟である。だから禪堂では暁天坐禪の終
る時、お袈裟をふくさより出して頭上に安じ(平
生はお袈裟を両手に捧げ)合掌して次の「搭袈
裟の偈」を唱え、仏弟子としての決意と感謝の
意をあらわすのである。

大哉解脱服 無相福田衣 披奉如来教
広度諸衆生

(大なる哉解脱の服、無相の福田衣、如来
の教えを披奉して、広く諸々の衆生を度せ
ん)

袈裟とは、袈裟色(カシャーヤ、すなわち木
蘭色)に染めた衣ということで、糞掃衣、つま
りお墓などに捨ててあつたぼろ布を拾い集め、
縫い合わせたものである。これは仏が弟子たち
に所有欲をおこさせぬように、廃品のリサイク
ルをはかったものといえる。それが時代が経つ
にしたがつて、信者から美しい布を寄施される

ようになるのだが、それをわざわざ小さな片に裁断して縫い合わせ、木蘭色やその他のくすんだ色（壞色）に染めさせた。このように裁断した小片を用いるので「割截衣」といい、縫い合わせた布片の数によって五条、七条、九条、十三条、十五条、二十五条等に区分され、九条以上を大衣、七条を上衣、五条を內衣（安陀会）といっている。絡子は五条衣を縮小したものである。

禅宗では法を伝えることを衣鉢を伝えるというように衣、袈裟を尊重するのだが、とくに道元禪師は『正法眼蔵』に「袈裟功德」「伝衣」の巻を著わし、袈裟が正伝の仏法の証であることを強調しておられる。

では、袈裟にはどのような功德があつて、何故にそれほど尊重されるのか。まず第一に袈裟は「解脱服」である。仏さまはみなこの袈裟をつけて修行し、さとりをひらかれた。蓮華色比

丘尼は遊女であつた時、戯れに袈裟をつけて踊つた因縁により、のちに出家得道し、阿羅漢となることのできたという話も伝わっており、お袈裟を着けて修行にはげむことが解脱（さと）に至る唯一の道である。お袈裟はまた仏さまの衣であるから、衆生に福德を与える衣「福田衣」であり、世の常の相を超えた「無相」の衣である。このようにお袈裟を身につけることは、仏の教えを身につけることであり、仏の御いのちを相続することであり、仏の御いのちを相続することは広く一切衆生を救うことであるので、お袈裟を身につける以上はいつでもこのことを心に誓わなければならない。その誓いをあらわしたのが前述の「搭袈裟の偈」である。

このような尊いお袈裟を携え、捧呈する儀式に臨む旅である。袈裟功德により明日の式典に間に合わないようなことはあろうはずがない。

午後二時四十分、金浦国際空港に着陸。入国
手続を済ませ、税関をパスしてロビーに出る。

「迎えの人は？」と見渡したが誰も見当らない。

「さてはうまく連絡とれなかったのかな」と思
っていたら、昨年訪韓の際万事にわたって世話
してくださった「尼さん」こと雪峰さんがひよ
っこりあらわれた。尼さんは日本語を知らない。
しかし彼女は必要と思われる日本語をメモして
来ており、「わたくし、釜山までいっしょにゆき
ます」と読み上げる。

早速尼さんのクルマに荷物を積み込み、釜山
に向けて出発し、ソウルの東インターより高速
道路に出たのが四時過ぎ、時折強い雨に見舞わ
れながらも百二十キロのスピードで走り続け
た。しかし南下するにつれ、四、五ヶ所で道路
工事のため渋滞に巻き込まれ、釜山フサのホテルに
着いたのは十一時四十分だった。通度寺の博物
館長釈梵河師と善光寺留学僧李煥秀君の迎え

を受け、打ち合わせを済ませ、ホッとした気分
で就寝した。思えばハラハラ、ハプニング連続
の一日だった。

袈裟の捧呈

八時半、台風之余波を受けての激しい雨の中
を通度寺に向って二台のクルマが動き出した。
一号車には釈梵河師と留学僧の李さんに理事長
夫妻、二号車には東隆眞先生と私、雪峰尼さん
が運転。

通度寺（トンドサ）は釜山北方約四十キロに
ある寺で、六百四十五年、新羅二十七代善徳女
王時代に、唐から仏舍利を携えて来た慈蔵律師
が、仏舍利を奉安するために創建したと伝えら
れる名刹である。

高速道路から降りてしばらく走ると、通度寺
の大きな駐車場があり、そこにある大きな門を
通り、素晴らしい溪流に沿って進むと、「靈鷲山通

度寺」と書かれた門柱がある。五台山月精寺（ウオルチョンサ）が「高山第一」といわれるののに対し、「野山第一」といわれるのがこの通度寺で、その名にふさわしく風光明媚の境内である。

靈鷲山りやうじゆせんというのはご承知のように、インドの王舎城の近くにある山で、お釈迦さまはこの山頂で説法したと伝えられているが、その「靈鷲山」がここ通度寺の山号になっている。それはこの寺のうしろにある山の形がインドの靈鷲山と似ているからだといわれている。

韓国には三大寺刹といわれる三つの寺がある。それは、通度寺、海印寺（ヘインサ）、松広寺（ソンガンサ）の三寺であり、この三寺は仏・法・僧の三宝を祀っている。すなわち、通度寺は、仏舍利を奉安しているので「仏宝」の寺であり、「仏宝の大本山」といわれる。海印寺は『八万大藏経』の版木が收藏されているので「法宝の大本山」、そして松広寺には修行道場である修

禅社がおかれているため「僧宝の大本山」とさ
れている。

道元禪師はお袈裟の功德を讃歎して、袈裟は
実に釈尊一代の説法そのものであることを強調
しておられる。山号がお釈迦さまの説法された
靈鷲山であり、そのお釈迦さまの遺身舍利を奉
安する通度寺であれば、お釈迦さまの身につけ
られたお袈裟を尊ぶのは当然のことである。果
せる哉、慈蔵律師が中国より将来されたという
お釈迦さまのお袈裟と、慈蔵律師が身につけた
お袈裟が観音殿に奉安されている。（これは年に
一度しか開帳されないので残念ながら拝観でき
なかつた）したがってまた、世界各地に伝わる
お袈裟を集め、その功德を遍く一切に及ぼそう
とする今回の世界袈裟展開催の意義もよく理解
できるのである。

さて、お釈迦さまご入滅以来、歴代祖師の中
で、道元禪師ほどお袈裟の徳を讃え、高く尊く

意義付けられた方はほかにはおられない。そこで善光寺方丈、育英会理事長はお袈裟とともに、道元禅師の名著『正法眼蔵』もぜひこの際読んでいただきたいとの念願から、特製の九十五巻本を謹呈された。「袈裟功德の巻」「伝衣の巻」その他随所にお袈裟の功德が懇切に説かれているからである。

十時、寮舎近くの通用門に入ってクルマを降りた。雨は小降りになっていたが、待機していただいた数人の若い坊さんがそれぞれ洋傘を持って迎えてくれ、まず金圓山先生のところに案内してくれた。金圓山先生は、日本の本山でいえば監院に相当する役職の方かと思われるが、同時に僧伽大学の講主として華嚴学を講じている新進気鋭の学者でもあった。ここで初相見の挨拶を交わし、銘茶でのどを潤し、少憩ののち靈鷲叢林、老天月下方丈様に案内していただいた。

右から黒田方丈、老天月下方丈、佐藤老師、李師



日本ではどんなに小さな寺でも住職は方丈と呼ばれるが、韓国では方丈と呼ばれる高德は四人しかおらず、老天月下方丈はその筆頭のお方といわれ、七十九歳とのことだった。少しも格式張ることのないいたって物腰のやわらかな好々爺といった感じで、本番前に習らしをと考えていた私たちをやきもきさせるほど気さくに四方山話をしてくださった。

そんなわけで法要前の習らしは出来ず、李さんが示してくれた通度寺側の差定（式次第）に従ってぶっつけ本番でいく以外にはなかった。

法要は大雄殿でおこなわれた。大雄とは仏殿のことであり、したがって大雄殿といえは仏殿のことである。仏さまが祀つてある殿堂のことである。ところが通度寺の大雄殿は違う。大雄殿の正面に「金剛戒壇」と書かれた額が掲げられている。そして仏さまを祀っていない。（須弥壇のうしろに相当する）正面の壁はあけられてお

り、すぐうしろにある舍利塔が見えるようになっていた。つまり舍利塔の中の仏舍利が大雄殿の本尊さまなのである。

大雄殿の天井は極彩色で、いかにも韓国様式のものだが、不思議なことにここにはタタミが敷かれており、日本の寺の本堂といった感じだったが、両班相對せず一山の大衆、私ども共々皆本尊に向つて坐るのであった。

法要はまず司会者の解説ののち、「三帰礼」からはじまった。これは「自帰依仏……」ではじまる三帰礼文で日韓同唱した。次に私が次のような香語を述べた。

無相福田解脫服（無相福田の解脫服）

二肩携来献真前（二肩携え来たつて、真前に捧ぐ）

堪飲世界袈裟展（飲びに堪えたり、世界袈

裟の展）

靈鷲山頭仏日圓(靈鷲山頭、仏日圓かなり) 恭しく惟れば今般、大韓民国野山第一、仏宝大宗刹、靈鷲山通度寺において、世界袈裟展を開催す。

日本国横浜成寿山善光寺現董、黒田大圓大和尚、需に応じ、日本曹洞宗袈裟九条大衣、安陀衣各二肩、並びに『正法眼蔵』九十五巻を携持寄進す。

因みに野衲をして点淨開眼、捧呈之儀を修せしむ。感激の至りに耐えず。

専ら祈る。日韓の親善友好、弥々濃やかに、如来の正法を万邦に及ぼし、皆ともに仏道を成ぜんことを。 至禱至禱。

ついで「三歸礼」同様、『般若心経』を日韓両語で同誦して法要を終り、式典に移った。

まず最初に私たち「来訪者紹介」があり、続いて善光寺側よりお袈裟と『正法眼蔵』の贈呈

があり、通度寺側より韓国の十五条大衣及び寺宝「華嚴曼陀羅」の写し(『華嚴経』一卷を一枚の絵にしたもの八十枚)、並に四人に各々茶碗一個が贈られた。

ついで老天月下方丈が立ち、日本曹洞宗のお袈裟と『正法眼蔵』を贈られたことに対し深甚の謝意と、併せて留学生育英事業に対する敬意と感謝を述べられ、日韓仏教の親善友好にお互い手を取り合つて進みたいと結ばれた。そして、老天月下方丈の意を体して金圓山先生が次のように歓迎の辞を述べられた。

夏の大雨の天気にもかかわらず通度寺に金欄袈裟を寄贈するためにご訪問いただきました日本国曹洞宗善光寺御住職の黒田武志御老師、龍光寺御住職の佐藤俊明御老師、駒沢女子短期大学副学長の東隆眞博士、そして黒田倫子先生の御四名様に通度寺の全大衆を代表

致しまして心から歓迎することをごさいます。

日本国曹洞宗は日本仏教史に最も卓越した道元禪師によって開創されまして「只管打坐、修證一如」を修行の根本にしまして御精進していらつしやると思います。道元禪師の名著の『正法眼蔵』による禪修行は仏教界に高い禅思想を鼓吹させております。

善光寺の黒田武志御老師が「海外留学僧派遣育英会」の理事長として世界仏教文化交流に大きな役割をしていらつしやるのは私どもの韓国仏教界にも広く知られておりまして、黒田武志御老師の大きな元からの力に深い敬意を払うことをごさいます。

私どもの通度寺はいまから一三四五年前の六四七年に新羅の大国統てごさいました慈蔵律師が中国の清涼山に入りまして文殊菩薩に祈りまして御釈迦様の真身舍利と金襴袈裟

を捧持して帰ってまいりまして、ここに通度寺を開創して戒律の根本道場として今に伝えられて来ております。そして、慈蔵律師の御袈裟と多くの宝物も大切に保存しております。

仏法が衣鉢を通じてマカカシヨウとアーナンドをはじめ三十三祖師に伝承されたのが法統であるという面で見ますと、御袈裟の意味は非常に大事だと思えます。だから私どもの通度寺聖宝博物館では御釈迦様の金襴袈裟と慈蔵律師の御袈裟をはじめ全世界各国の各宗派の御袈裟を集めて展示しまして、仏法の時間的・空間的真理を一目瞭然に見られるようにしまして、御袈裟の功德ですべての罪が消滅されて煩惱を離れ、一切衆生が一法界の中に和合されたすがたで生存しているのを見せ、世界平和を達成すればということをごさいます。

今日の儀式を契機として曹溪宗と曹洞宗との文化交流がもつとなめらかに進むのを望みながら、金欄袈裟を寄贈いただきました御四名の方にもう一度深い感謝の言葉を申し上げます。

仏紀二五三五年七月三〇日

大韓仏教曹溪宗靈鷲叢林通度寺

僧伽大学教授 金圓山 合掌

これに対し、東先生が次のように答礼辞を述べられた。

御挨拶

善光寺海外留学僧派遣育英会理事

東 隆眞

このたび、大韓民国の仏教を代表する三大寺院の雄、大韓仏教曹溪宗本山・靈鷲山通度寺さまに拝登する仏縁をいただいたことは、

私どものもつとも深い法悦とするところであります。

ここに、善光寺海外留学僧派遣育英会より日本の曹洞宗の袈裟九条衣二肩、絡子二肩を謹んで拝呈させていただきます。

靈鷲山通度寺の方丈・老天月下猓下より、わが善光寺住職、善光寺海外留学僧派遣育英会理事長、黒田武志へ御要請がございました。世界各地のお袈裟を通度寺に集めて、これを広く展示し、お袈裟の精神で世界を結び、大聖釈尊の智慧と慈悲の仏心を高揚したいのでぜひ協力してほしいとお言葉でございます。

黒田武志は、かねてより釈尊の智慧と慈悲の仏心を通じて、仏法の興隆と世界の平和を促進し、実現したいという大誓願を抱いておりますので、老天月下猓下のお言葉とご要請に深く共鳴するところがあり、特に法衣店に



捧呈した品々

九条二肩と絳子二肩の縫製を命じて、佐藤俊明常任理事（日本国、千葉県柏市、曹洞宗龍光寺住職）による点浄の儀を修し、今回の運びとなった次第であります。

靈鷲山通度寺のご開山慈藏大師は、中国で仏教、戒律を修学し、お仏舍利と釈尊のお袈裟を将来し、このお寺に奉安されました。「釈迦如来袈裟」は通度寺の寺宝であり、大韓民国の国宝であるとうけたまわっております。

また、靈鷲山なる山号は、通度寺の背後にある山のすがたがインドの靈鷲山に似ているところからその名が付けられたといわれます。

インドの靈鷲山は、インドの王舎城の東北にある山の名前で、その山頂で、釈尊はご説法をなさったのであります。これらを総合して考えますと、靈鷲山通度寺は、大韓民国における釈尊のお寺、釈尊が現にましましてご説法をなさっているお寺であります。通度寺が

仏宝のお寺とよばれる尊いゆえんも、また、ここにゐるわけであります。

御高承のとおり、お袈裟は仏教徒の標幟であります。およそ二六〇〇年のむかし、インドの釈尊にはじまつて、歴代の仏仏祖が、これを身にまとい、尊び、護り、伝えて来ているのであります。およそ、出家、在家を問はず、老若男女を分たず、仏教徒であるかぎり、お袈裟を頂戴し、そのころによつて、信仰生活を深め、高めていくのであります。大乘本生心地観経に、お袈裟は、わが身の煩惱を離れ、罪を滅ぼし、世の平安と幸いをもたらす功德をそなえていと示されてあります。

私も日本国の曹洞宗高祖道元禪師の代表的撰述『正法眼蔵』は曹洞宗の宗典に規定されてゐます。この『正法眼蔵』九五巻のなかに「袈裟功德」、「伝衣」と名づける巻があり

ます。ひとたび、お袈裟を身につければ、私どもがただちに釈尊とつながり、釈尊のご説法を直接に肌身で聞くことになる、仏教が正しく伝わるというのはお袈裟が伝わることにほかならないとして、お袈裟を尊んでいます。そして、お袈裟の普及を念願し、お袈裟の種類、被着法、洗滌法、裁縫法にいたるまで綿密な教えをしるしてゐます。これを拝読すれば、お袈裟のすばらしさをよく理解することゝ出来ます。そして、只今から将来に向けて私ども仏教徒が人類や世界に対して果してゆかなければならない永久平和実現の重大な役割に気づかされるのであります。

ちなみに、このたび、道元禪師の名著『正法眼蔵』九五巻を通度寺に謹呈させていただきます。道元禪師は、日本仏教の各宗派のなかでも最も釈尊を崇拜し、釈尊に帰依し、釈尊を目標とした祖師であります。道元禪師の

法脈は、大韓仏教曹溪宗と同じ釈尊より数えて第三十三祖大鑑慧能禪師の流れを汲む曹洞宗でありますが、曹洞宗の御本尊はいうまでもなく釈尊であります。『正法眼蔵』には、くりかえしますが、仏教の真髓を正しく伝えて来た人たちは、必ずお袈裟を正しく伝えていると説いてあります。かくて、釈尊とお袈裟と『正法眼蔵』とは、道元禪師においては一体であります。

黒田理事長は、このたび、特に、曹洞宗大本山永平寺（日本国福井県）に依頼して、永平寺蔵版『正法眼蔵』九五巻（眼蔵会八十周年記念出版。桐箱入。四帙二冊。和装。因州和紙使用。木版刷）を求め、通度寺にご寄贈させていただくことにしたのであります。どうぞ、お受けとり下さい。

通度寺に曹洞宗大本山永平寺が刊行した道元禪師の『正法眼蔵』九五巻が、お袈裟、絡

子とともに通度寺に奉獻させていただくことが出来たのは、ひとえに仏天のお加護によるものであります。そして、日韓仏教、韓日仏教の親善交流をさらに拡張していく新しい歴史的、宗教的、国際的の第一歩が始まったものと確信するのであります。

さきほど申しあげましたように、仏教は、煩惱に翻弄されている現実の罪深い私どもが、仏の教えによって内省し、智慧と慈悲をそなえた真実の自己を実現し、あらゆるすべてのものを尊び、おたがいに仲よく生きていくことを教える宗教であります。

通度寺が世界のお袈裟の総本山となり、世界の仏教、宇宙、人類が交流し親善する一大拠点となるのは、まことに通度寺にふさわしい出来ごとであろうと存じます。通度寺が今後ますます発展し、繁栄して、釈尊の教えが多くの人びとのなかに広まり、世界の平和が

完全に実現することを心から祈念して止みません。

ひとこと、ご挨拶を申し上げます。

仏紀二五五七年

平成三年（西紀一九九一年）七月三〇日

東先生の答礼辞終って「四弘誓願」を日韓同誦して式典を終り、祈念撮影で散会した。

少憩して食堂に赴き昼食をいただいたが、大きな食堂で方丈以下一山の衆のみならず信者の人びともいっしょに簡素な食事をいただくことには学ぶべきものが多かった。

一時半、大勢の方々に見送られて通度寺を辞して慶州に向かった。

慶州では仏国寺、そして石窟庵の釈迦如来像を拝観したが、これについては『成寿』第一五号に記載してあるので省略する。

袈裟の護持

朝八時、土砂降りの中を二台のクルマで海印寺に向った。前日同様の配車区分である。

昨年もたしか八時に出発したのだったが、今回は悪天候のため約四十分も遅れて、海印寺についたのは十一時半をまわっていた。

前述のとおり、海印寺は、通度寺が仏宝の大本山であるのに対して法宝の大本山である。法宝、八万大藏経を收藏しているからである。大寂光殿（本堂）のうしろの急な階段を登ると、大藏経を収めた二棟の藏経閣があり、ここに国宝の八万二千五百五十八枚の経文を彫りつけた版木がある。書庫様式の建物で、日本の正倉院と同じような校倉造りあせくらになっており、まことに通風性がよく、常温常湿のすばらしい收藏庫である。

大邱駅を一時十五分で発車するソウル行き

特急セマウル号に乗らねばならぬので、もう残り時間がなくなり、藏経閣をかけ足で拝観しただけで退かせねばならなかった。

雨のため道路は混み、ようやく大邸の市街に入ったところ、こんどは地理不案内の雪峰さんが信号待ちの間に一号車を見失ってしまった。ようやく駅に着いた時は発車時刻寸前だった。

釈梵河師が大きく手を振り、下車位置を示し、私たちが促がしている。東先生と私は精一杯かけ出した。駅員も協力してくれて改札口も素通りし、階段を降りてホームに一步足を踏み入れた途端、理事長夫妻と李さんを乗せた列車は動き出した。かくなるうえは雪峰さんのクルマで還るしかないが、セマウル号が四時半にはソウルに着くのに、私たちはいつたいたいなんにソウルに着けるのか。

再び雪峰さんのクルマに乗り、釈梵河師の先導で街の渋滞をようやく切り抜け、窓から手を

出して去りゆく釈梵河師のクルマと別れてインターに入った。ところが閉鎖。雪峰さん、随分交渉したが門前払いだった。またもや渋滞の市街地に入り、どうにか抜けて淋しい田舎道に入ったが、雪峰さんも自信がなさそうで、二、三度道をたずね、緊張した顔で黙々と運転している。どの方向に走っているのか見当もつかない。雨はいっこうに止みそうもなく、二時間近くこうした状態が続いて、ようやく倭館のインターにさしかかったことがわかった時はほんとうにホッとした感じだった。雪峰さんの顔にも多少ゆとりが出て来たように安心した。

高速道路はわりに混んでなかった。前のクルマが一二〇キロで走っていても、雪峰さんは「そこどけ！」「そこどけ！」「といわんばかりにピカピカ、信号を送って一四〇キロで走る。途中道路工事による渋滞もあったが、ソウルの東インターに入ったのが六時十五分、漢江の千戸大橋

を渡って雪峰さんの寺、祇園精舎に着いたのが
ちょうど七時、思ったより早かった。

海印寺でクルマを別にして数時間しか経って
ないのだが、その数時間は大邱とソウルの距離
以上に長く感じられた。私たちを案じていた理
事長のいわれるには、「今朝もご祈禱したのでこ
んなことあろうはずがないのに、どうしたこと
かと考えたんですが、これはやはりお袈裟のお
指図ですよ。通度寺で頂戴した韓国のお袈裟は
お二人方に携えていただきましたのですよ。
これで日本と韓国の袈裟を携えて韓国を縦断し
たことになります。これは素晴らしいことです」
そういわれればなるほどそのとおりで、袈裟
の功德を蒙るのが今回の訪韓の大目的であり、
それには袈裟を身から放してはならなかったの
である。

祇園精舎では雪峰さんのお弟子さんがたがす

にて伽僧山角三



っかり夕食の準備をととのえており、箸をとるばかりになっていた。ここで一同、雪峰さんの労を謝し、食事を共にすることになったが、そこに昨年私たちの訪韓を企画してくれた昨年度の留学僧の韓京洙さんがやって来た。彼はいまソウルの東海大学で学究生活を送っている。韓さんの来訪で通訳が二人となったので話は尽きなかった。

翌日は、雪峰さんのお師匠さんのおられる三角山僧伽寺を訪れた。ソウルの北方、北漢山国立公園の中にある正三角形のように屹立した標高八百メートルの岩山の頂上にある寺である。特別に改造されたジープで四十五度前後の曲折した斜面を登るスリルはまさにジェットコースターに乗ったようなもの。一同ひやひやしてよ

うやく山頂に着くと、これまた意外、この山頂によくぞこれだけの伽藍が、と思われる建物の数々が大岩とマッチして建てられており、百八の石段を登ると大きな磨崖仏がソウルの街を見おろしている。ここは薬師如来の聖地で、ソウルでもっとも美味しい水といわれる霊泉が湧き出ている。参拝終って、この霊水で点てていただいたお茶の味はまた格別だった。

この寺はもともと男僧の寺だったが、五十年前より尼僧の寺となり、爾来発展整備されて今日に至っているというが、韓国における尼僧さんの活躍は素晴らしい。また日本と異り、出家仏教であるが、信者との心のつながりは日本よりも強いように感ぜられた。この点おおいに反省しなくてはなるまい。